

TOKAI原子力サイエンスフォーラム

科学と社会の関わりからまちづくりを考える

村が行っている社会科学分野の若手研究者への支援事業に関して、平成27年度の成果を報告しながら、世界に開かれた研究開発拠点を目指す東海村の“まちづくり”について考えます。

●日時 3月6日(日) 午後1時～4時

●場所 産業・情報プラザ*アイビル*(旧リコッティ)

●入場料 無料

●問い合わせ まちづくり推進課原子力サイエンス・国際化担当(☎282-1711 内線1342) ※事前申し込みは不要です。

ご来場をお待ちしています!



●プログラム

13:00	開会(12:30 受け付け開始)
13:05	東海村研究支援事業成果報告 ▶「支援事業の意義と選考結果について」 講師▶滝田薫さん(茨城キリスト教大学教授、支援研究選考委員長)
13:15	報告① ▶「東海村の自主防災活動をより活性化させるためにはどうしたら良いか?」 報告者▶梅本通孝さん(筑波大学准教授)
13:40	報告② ▶「原子力防災力の充実のための役割はどのように分担されるべきか?」 報告者▶中川唯さん(東京工業大学大学院)
14:05	報告③ ▶「どのような高レベル放射性廃棄物の“処分”が望ましいのか?」 報告者▶渡辺凜さん(東京大学大学院)
14:40	講演 ▶「東海村のまちづくりに一言! - 科学を理解し支援するとは -」 講師▶松原克志さん(常磐大学教授)
16:00	閉会

ふるさと歴訪ー自然を探してー

東海村にもセンリヨウが?



東海村緑化審議会

副会長

安嶋 隆

センリヨウ(センリヨウ科)は、本州(関東以西)、四国、九州、沖縄の常緑樹林内に生える、常緑小低木です。葉は対生していて、縁に鋭い鋸歯があります。枝先に小さな花が集まって付き、果実は球形で、12～3月に赤色に熟します。赤い果実が美しいので栽培されることもあり、正月の縁起物としてもなじみ深い植物です。マンリヨウ(ヤブコウジ科)とよく似ていますが、マンリヨウの果実は下向きに付くので、容易に区別することができます。

県内でセンリヨウの自生の記録はありませんが、観賞用として庭先に植えられることがあります。神栖市はセンリヨウ栽培で有名な産地で、全国の7割近くを生産しているそうです。正月が近づくとも目にするセンリヨウは、県内で栽培されたものが多いようです。

当然、村内にセンリヨウの自生地はないことになりましたが、現在進められている総合調査により、舟石川、石神内宿、照沼などのスギ林内で、小さい群落があることが確認されました。過去の記録にはなかったことから、



センリヨウ(センリヨウ科)

栽培されていたものが逃げ出したと考えられますが、詳しい経過は不明です。このような場合、自然分布している「自生種」に対して、栽培されていたものが逃げ出したという意味で「逸出種」として区別します。今では、村内で見られる正月の縁起物は、アリドオシ(一両)を除いて、ヤブコウジ(十両)、カラタチバナ(百両)、センリヨウ(千両)、マンリヨウ(万両)の4種類ということになります。

他にも村内で確認されている逸出種は、キタチコマツナギ、イタチハギ、ハリエンジュ、クスノキ、カクレミノ、ネズミモチ、トウネズミモチ、モチノキ、ナンテン、ヒイラギナンテン、オモトなどがありません。今後その種類や生育地は増加すると推測されています。

これまで、植物調査等では自生種の記録が中心でしたが、現在進行中の総合調査では自生種・外来種・逸出種の区別を明確にして、自然環境の変化を知る基礎資料にしたいと考えています。